ふるさと学習　民俗学レポート

研究テーマ

巡礼道
三枝草峠から百町峠まで
～ 板坂の果たした役割 ～

3年　1組　38番

氏名　山口華永

はじめに

1年生の時に板坂から夢前にぬける峠・巡礼道を調べたことがある。その時は、峠について調べたので、巡礼道や巡礼のことをあまりくわしく調べていなかった。

そこで、まず巡礼及び巡礼道について理解することから始めたい。その上で巡礼道において、「板坂」が、どのような役割をを果たしていたのかを、文献調査や聞き取り調査、さらにフィールドワークを行って探っていくことにした。前回調べたときに、板坂に茶屋があったことを聞いた。板坂は巡礼道の単なる通過点ではなかったという仮説がたてられる。

1、巡礼道とは

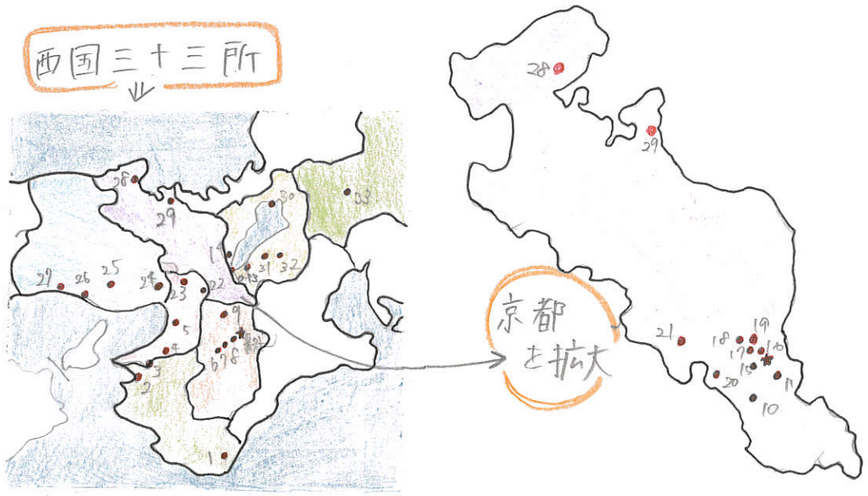
「巡礼」とは、信仰を確認し、より深めようと霊場を旅することを言うそうだ。日本の巡礼は、一定の地域の中にある聖地を、数を限定して巡るのが主。その数とは、「西国霊場」の三十三であるとか、「四国霊場」八十八であるとかの宗教的な意味を持つ数である。(西国観音巡礼の他に、四国八十八遍路や坂東、秩父の観音巡礼など日本各地に様々な巡礼コースが設けられている。) 西国観音巡礼は、そのような中でも、最も歴史が古く、参拝者が多い事で知られている。

2、観音巡礼の開創伝説と再興

養老二年(718)、大和長谷寺の徳道上人は、病気のため仮死状態になったとき、夢の中で閻魔王に出会う。

閻魔王は「お前はまだ死ぬ事を許さない。世の中には、悩み苦しむ人々がたくさんいる。その人々を救うために、三十三箇所の観音霊場をつくり、人々に巡礼をすすめなさい。」と言い、起請文と三十三の宝印を授けた。上人は、仮死状態から蘇り(黄泉がえり)、閻魔王から賜った「三十三の宝印」にしたがって三十三の霊場を設けるが、世の人の信用を得られず巡礼は発展しなかった。

その270年後、途絶えていた観音巡礼が、花山法皇によって再興されることになる。



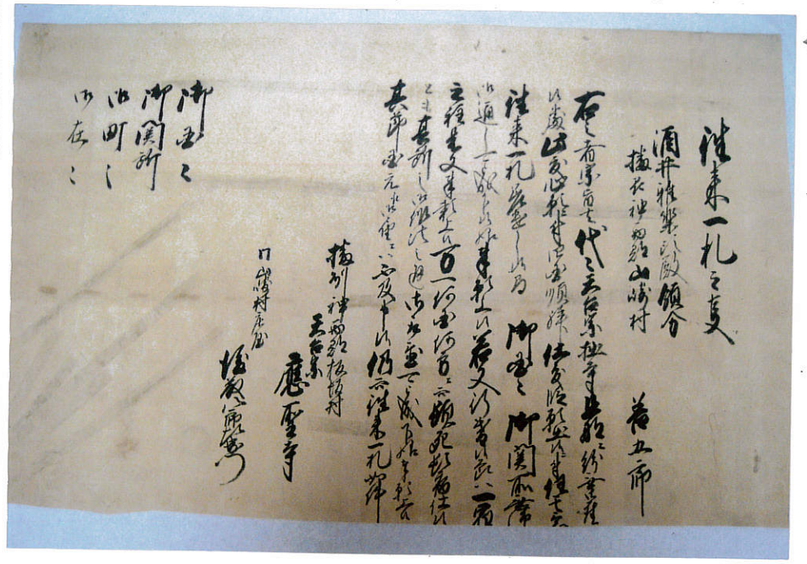
① 那智山・青岸渡寺
② 紀三井山・金剛宝寺護国院
③ 風猛山・粉河寺
④ 槙尾山・施福寺
⑤ 紫雲山・葛井寺
⑥ 壺阪山・南法華寺
⑦ 東光山・龍蓋寺
番外 豊山・法起院
⑧ 豊山・長谷寺
⑨ 一・興福寺
⑩ 明星山・三室戸寺
⑪ 深雪山・上醍醐寺
⑫ 岩間山・正法寺
⑬ 石光山・石山寺
⑭ 長等山・園城寺観音堂
番外 華頂山・元慶寺
⑮ 新那智山・観音寺
⑯ 音羽山・清水寺
⑰ 補陀洛山・六波羅密寺
⑱ 紫雲山・頂法寺
⑲ 霊鷲山・行願寺
⑳ 西山・善峯寺
㉑ 菩提山・穴太寺
㉒ 補陀洛山・総持寺
㉓ 応頂山・勝尾寺
㉔ 紫雲山・中山寺
番外 東光山・花山院菩提寺
㉕ 御嶽山・清水寺
㉖ 法華山・一乗寺
㉗ 書写山・圓教寺
㉘ 成相山・成相寺
㉙ 青葉山・松尾寺
㉚ 厳金山・宝厳寺
㉛ 姨綺耶山・長命寺
㉜ 繖山・観音正寺
㉝ 谷汲山・華厳寺

3、誰が何のために？

巡礼は、江戸時代に盛んになった。それまで続いていた戦(いくさ)の世が治まり、平和な世の中になったからだ。

その頃の人口の割合は、ほとんどが農民だったため巡礼者の多くは、農民だったらしい。農民は、五穀豊穣や無病息災を願い、村を代表して、一生に一度だけ、一年間かけて、西国巡礼の旅に出ることができた。旅の資金は、村の庄屋や村人の寄付で賄(まかな)っていたという。

このように、代理として参拝することを「代参(だいさん)」といい、お札などをもらって帰ってきたらしい。



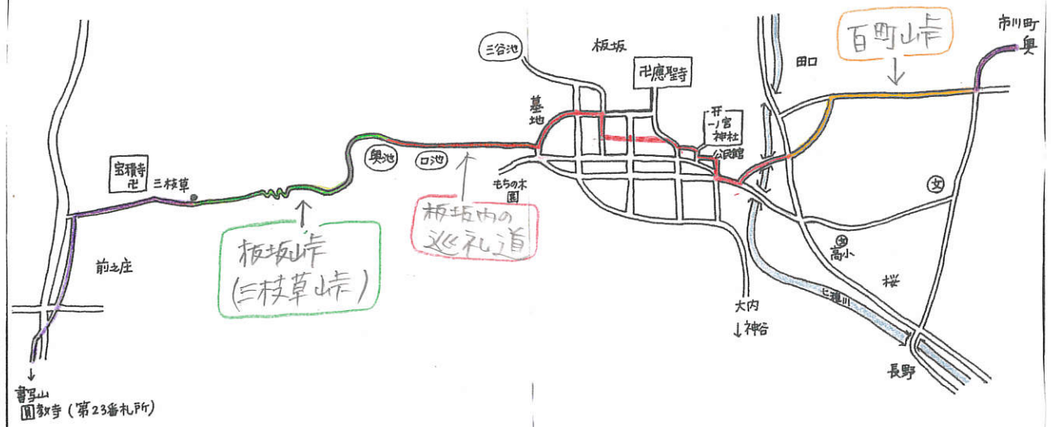
←これは、関所を通るための通行手形。(應聖寺に残っている。)

和歌山県にある、那智山青岸渡寺からはじまり、番外を3つのぞく、33箇所の寺を岐阜県の谷汲山華厳寺まで順に歩いていく場所。(これが西国三十三所)

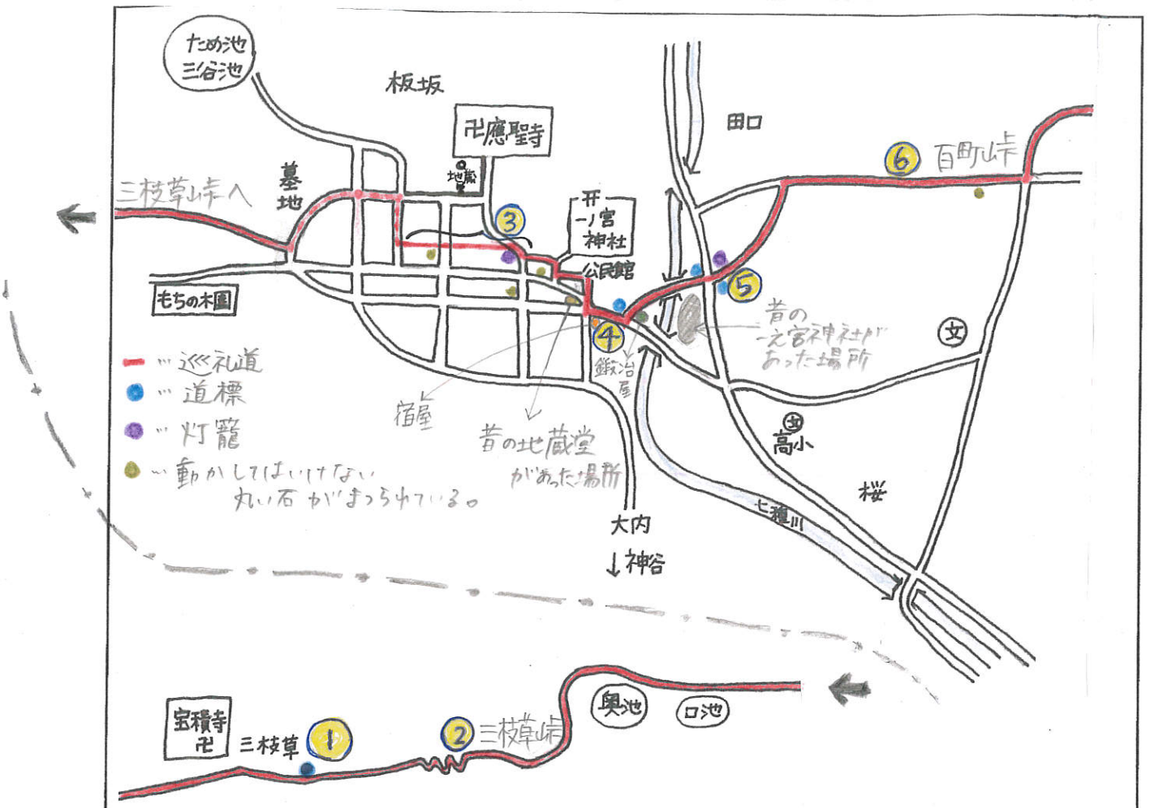
どこから始めてもかまわないが、必ず33箇所のお寺・観音様の霊場をまわらなければならない。

4. 板坂に残る巡礼道の名残り

西国三十三所の観音札所を巡る巡礼道は、書寫山圓教寺(第23番札所)から丹後の世野山成相山成相寺(第24番札所)までの道中で、福崎町西北端を通過する。すなわち、姫路市の北西にある書寫山から北へ夢前川の谷を飾磨郡夢前町(現在は姫路市夢前町)前之庄に進み、そこから峠をこえると福崎町板坂にでる。そこを通り過ぎれば田口地区。左折して、百町峠という低い峠を越えると、隣町の市川町奥にでる。それからは、市川の谷を一路但馬の生野町、竹田、そして丹波の夜叉野の経て成相寺へと向かうのである。



←これは、板坂峠(三枝草峠)の道中にあるお地蔵さんである。現在は何もなかったが、明治には、この辺りに茶屋があったそうだ。菓子などを売る店ができるほどにぎわっていたらしい。



① 峠の出入り口にある道標
「ひたりなれあい」と読みとれる。
⇒左(峠の出入り口の方)に角がると、成相山成相寺に行けるという道標。

② 峠の頂上(板坂方面から見た)
現在でもちゃんと通れる道が残っていた。ところどころ通りにくい所もあったが、ここを通っていたということはたいへんだったのだろうと思った。

③ 板坂内の巡礼道の一部
板坂1隣保にある田んぼのわき道から、應聖寺の下まで全長200mほど幅60cm～1mほどの道がある。左の写真の灯籠があることから、これが巡礼道だったという確かなことが分かる。
現在、主道ではない道が巡礼道だったことにおどろいた。

④ 田口へ曲がる巡礼道の道標

上部に「ひたり」というのが見える。「左」ということではないだろうか。全く何と書いてあるのか、わからない。しかし、左に行くのは、巡礼道として、合っている。ここを曲がるのがわかりにくかったために、つくられたのではないだろうか。

さらに行くと、松尾橋があり、そこをわたると田口へとつづく。松尾橋付近には、お地蔵さんがあったそうだ。現在は慶聖寺にある。松尾橋をわたって右にかって、板坂の一之宮神社があったそうだ。なので、その付近の人たちの名字は「宮下」が多い。巡礼道は、一之宮神社のすぐ裏手を通っていた。(大正二年(1913)に遷座完了された。)

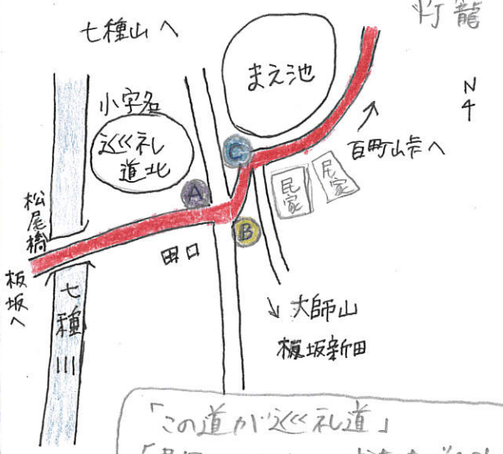
ここを進むと、次の峠「百町峠」につながる。

Ⓐ

Ⓑ

Ⓒ

⑤ 峠に入る十字路の道標・灯籠



「この道が巡礼道」
「書写より16km、成相まで92km」
(1里は約4km)ということを示しているのだろう。

Ⓐの道標…「右、丹後成相山　左、前之庄宍栗」と掘ってある。

Ⓑの道標…「此方㊟㊥わいミち」
「しょしやより四里、㊧れあり二十三里」と掘ってある。

Ⓒの灯籠…まえ池　七種神社の灯籠。

⑥ 百町峠

竹やぶ（この前まで民家がある）

田口の細い道

上り（田口から峠の山頂へ）

峠の地蔵さん（頂上にある）

下り（市川町の方へ）

豊房大明神（稲荷）がある

5．板坂の果たした役割

26番目の法華山から27番目の書写山まで約25km、書写山から板坂まで16km、合わせて約41kmになる。1日の行程として、ちょうど板坂のあたりにたどりつくのではないだろうか。また、板坂、田口、奥の間は人家のない峠である。そこで、板坂は南から来る巡礼者の宿泊地の役割りを果たしていたのであろう。板坂には、巡礼者を宿泊させる家（はたご）が明治末から大正時代には八戸あり、巡礼者はとめたが、それ以外の人は、（怪しい者も少なからずいたのでいたので）宿泊させなかったそうだ。巡礼者を宿泊させる家（はたご）は旅館のように「もうけ」を目的としたものではなく、信仰心からの行為だったそうだ。

巡礼者が多く来たのは、春の4月から5月にかけてと秋の9月であった。巡礼者は1人、あるいは夫婦者、子ども連れなどさまざまであった。泊めてもらうと、宿泊した人が部屋に棚を設けて、観音像を安置した。信仰心のある村の人々が参拝した。1人で泊まることはまれで、知人であるか、否かにかかわらず、三人ずつぐらいずつに分かれて泊まった。

また、昔は板坂村庄屋の家の下にあった地蔵堂にも泊まったそうだ。東の方からは、岐阜・滋賀方面からも来たという。

◎宿泊所としての地蔵堂

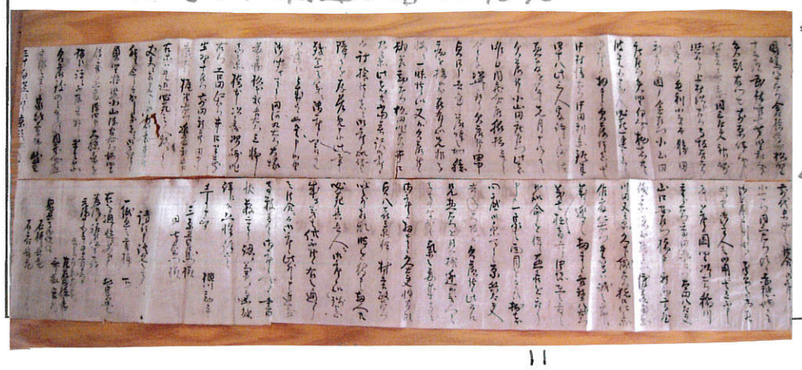
地蔵堂に関する話を1つ紹介する。

巡礼者の往来が盛んであった江戸時代には、板坂村に地蔵堂があり、三州（三河国・現愛知県）から孫2人を連れたお年寄りの夫婦が成相寺に向かう途中にこの地蔵堂で1泊したそうだ。

その夜、お年寄り夫婦の容態が急に悪くなった。村中の人たちが、この家族に薬や食べものなどを用意し、手厚く介抱したと伝えられている。しかし、お年寄り夫婦は他界してしまったそうだ。残された孫2人の身の上を案じた村中の人たちは、旅の無事を祈り、「次の村へお継ぎ送りをお願いする」と道中の村々にあてた1通の手紙を添えて送り出したそうだ。

この地蔵堂は、のち大正8(1919)年に巡礼道沿いにあったところから少し北へ移設された。

◎赤穂事件関連文書の発見



←應聖寺に現存する文書を見せていただいた。

←應聖寺のふすまの下張りとして使われていた。

平成14年12月6日　赤穂事件関連文書（赤穂浪士の1人横川勘平が討ち入りに参加する「忠義の者」と脱落した「不忠義の者」を列挙した書状、と吉良家・家老が泉岳寺の僧に宛てた吉良上野介の首受取証文の2種の文書写し）が應聖寺で発見された。

忠義・不忠義の者の現況を記したリスト、及び上野介の首のゆくえを知らせるという手紙の性格から、おそらくは、当時離縁して豊岡に居た大石内蔵助の妻りくに届けられるべき書状であったのではないだろうか。應聖寺は、書写山圓教寺から成相山成相寺への巡礼道に面することから、赤穂からの使者も豊岡へ通じる最短のこの巡礼道を通ったことであろう。但し、何故その手紙がここで止まってしまったかは不明であり、今後の調査を待ちたい。

おわりに

巡礼、巡礼道について改めて調べることで、当時の人々の信仰心の厚さを知ることができた。また、村を代表して巡る「代参」の場合は、重い責任もあるのだろうと思う。

板坂の巡礼道が果たした役割りは私の考えている以上に大きいものだった。多くのエピソードが残っていることからもうかがえる。

フィールドワークでは、巡礼道に関わる多くの道標やお地蔵さんなどを見つけることができた。板坂が巡礼道の要所であったことがわかる。

赤穂事件の関連文書が應聖寺で見つかったことから、巡礼のための道であるとともに、「街道」としての役割も果たしていたのだろう。

今回の調査では、應聖寺の住職、桑谷祐顕さんに多くの話をうかがった。この場をかりてお礼したい。

今後は板坂を出た巡礼者が成相寺にたどりつくまで、どのような行程をたどったのか調べてみたい。板坂と同じような役割りを果たしていた地域があるはずである。板坂とその地域とを比較してみるのも、おもしろいと思う。

参考文献

・板坂村史（桑谷祐顕、山内恒夫、平成15年3月3日発行）